

老施協

10
Vol.553
OCT.2016

ROUSHIKYO

公益社団法人全国老人福祉施設協議会広報誌

第8回介護作文・フォトコンテスト最優秀賞受賞作品
田村 麻衣さん/「うんとこしょ! どっこいしょ!」



特集 「平成28年度経営戦略セミナー」ポイント解説

社会福祉法人制度改革の対応と 介護保険のゆくえ

Topics

- 在宅介護セミナー
保険内外のサービスや在宅福祉の強化など
在宅介護の限界を延伸するための方策を学ぶ
- 平成28年度社会福祉法人新会計基準実践的基礎講習
実務で必要となる知識・スキルを学ぶ

連載

- 未来の介護はこう変わる!
介護IT&テクノロジー新潮流 第3回

キラリ! 施設紹介

- 社会福祉法人蓬愛会
ケアハウスケアプラザ而今 (栃木県宇都宮市)

大きく育つふくしの森は多くの人の慈しみと献身の成果です。
森の成長と営みに情熱をささげる人たち。
その想いと夢を語ってもらいます。



聞き手=河内 孝(全国老施協理事)

【第7回】



篠塚恭一氏

株式会社エス・ピー・アイ
あ・える倶楽部
代表取締役

しのづか・きょういち
1961年、千葉県生まれ。83年、大手旅行会社の添乗員を経て、旅行専門の人材派遣会社に勤務。91年、旅行会社へ添乗員派遣などを行う株式会社SPIを設立。98年、高齢者とその旅を支える人々が集う場として「あ・える倶楽部」を設立し、本格的な介護旅行サービス事業を開始。2006年、NPO法人日本トラベルヘルパー協会を設立。

約7000人の介護旅行データを活かして
要介護高齢者の「旅行」をもっと身近なものに

旅行を諦めてしまう
高齢者との出会いがきっかけ

——平成10年から、介助が必要な人への旅行サービスを始められました。

篠塚 旅行代理店に勤めていたので長年、お客様との付き合いがあったのですが、70歳を過ぎたあたりから旅行を諦めてしまう方々が出てきました。理由を聞くと、「要介護状態になった」「杖をつき始めた」からと、周りに迷惑をかけることを嫌ってやめる方が多い。ですので、もう一歩踏み込んだサービスができれば、旅行に行つてくださる、旅を楽しんでくださる方がいるのではないかと思います。大手に提案しましたが、乗ってこないで自分で始めました。

——海外に先行モデルがあつたのですか？

篠塚 アメリカの大都市には、介助も含めたボランティア組織があり、数十の言語に対応し、いろいろなニーズの町歩きをサポートしています。イギリスではロイヤル

ファミリーのつくった基金を活用して盲導犬と一緒に旅行したり、北欧などでも移動・外出とか海外出張でも、専門のワーカーが24時間のアテンドをする。それが社会保障費用から出るようになっていきます。

——第一号のお客様は？

篠塚 忘れられませんが、『五体不満足』で有名になった乙武洋匡さんが早稲田大学の学生のとときに、我々の活動を紹介してくれて、それを読んだ山口県の方から、「うちの姉は寝たきりだが、どうしても死ぬ前にナイアガラの滝を見たいと言っている」と電話がかかってきました。当時、76か77歳の方でした。航空会社、ホテルなどでバリアフリーの有無を調べて、どうやって寝たきりでトイレも自分で行けない人を飛行機で連れていくか。航空会社との交渉は大変だったんですけど、カナダ航空が受けてくれたので、「じゃ行こう」ということになりました。

——期間は？

篠塚 1週間ですね。ほんとにナイアガラの滝を見に行っただけ。その方を普段介護されているヘルパーさんを慰労したいということ、その人とうちのスタッフが一緒にやれば、と思って送り出しました。ところが、時差のためにヘルパーさんがまいっちゃって、ほとんどうちのスタッフが一人で介助して、へとへとになって帰ってきました。

——こういう介護付き旅行は、オーダーメイドですから高いんじゃないですか？

資料を見ると、だいたい本人と添乗員の旅費プラス数万円程度となっています。

篠塚 自立して見守り程度だと1日2万円、それ以外は障がい程度によって異なりますが、1日2〜3万円です。1回あたりの費用はそれなりにしますが、ずいぶんと良識的に行っているつもりです。

「100に行きたい」の
気持ちに添う

——「あ・える倶楽部」のもうひとつの活



かわち・たかし

1944年、東京生まれ。ジャーナリスト。慶應義塾大学卒業後、毎日新聞社入社。政治部、フシントン特派員、外信部長、論説委員を経て社長室長。2000年、取締役中部本社代表、常務取締役メディア・出版担当などを歴任し、2006年退社。国際厚生事業団理事、東京福祉大学特任教授などを務める。著書に『自衛する老後』（新潮社）など多数。

動にトラベルヘルパーの養成があります。これまでに何人ぐらい養成されましたか？

篠塚 1000人ぐらいです。養成はまず、車いすを押すところから始まります。身体障がいがある方、体に不自由が出てきた方に旅先で介護サービスを提供するので、高齢化に伴う問題、つまり、どういう疾病が出てくるか、もし身体に不自由が生じてきた場合にはどういうサポートが必要になるか、などを中心に教育訓練を始めました。添乗員の資格を持っている人の上級の専門訓練として取り組み始めたのです。

—— 介護研修ですね。

篠塚 最初に助けを借りたのは、障がいを持っていてる人たちです。さまざま工夫をして外出したり旅に出たりしている人たちがいて、その中にボランティアで入って、排泄のこと、入浴のこと、食事のことなどいろいろなやらせてもらって、介護研修を手探りで始めました。そのうち介護保険ができて高齢者介護が制度化されました。以降は、添乗員に介護研修をするのではなく、ヘルパー2級以上の人たちに移動とか旅行のノウハウを勉強してもらおう方向に切り替えました。

—— 協会のトラベルヘルパーは、ほとんどが介護の資格を持っているのですか？

篠塚 ええ、持っています。介護の資格がなくても勉強できるトラベルヘルパー3級を

つくって、基礎教育みたいなこともやっています。しかし、基本はヘルパー2級以上ですね。

—— 篠塚さんの取り組みは、時代を先取りされていたと思います。ハンディのある人に、「〇〇なら行けます」ではなくて、「どこに行きたいか」を聞き、どうしても実現できるかを考え、提案した。なかには、さぞかし難問もあったでしょうね。

篠塚 そうですね。日本では治療できない方を外国にお連れするとか。空を飛びたい、海に潜りたいなど、もう亡くなることばかりわかっているのに、最後にこれだけはおきたいというリクエストが多くて。

—— スキューバダイビングは、要介護者でもできるのですか？

篠塚 できますね。

—— 現在、篠塚さんのところの企画ツアーは、年間400件ぐらい？

篠塚 400〜500件あります。まだまだ行きたい方が数多くいらつしやるので、いろいろなところでやっていたけるとありがたいですね。

—— 500件の中身を見ると、最後にお墓参りしたい、故郷を見たいというのが多いそうですね。

篠塚 多いですね。あと、ターミナルケアを受けていて、家族と最後の思い出をつくらうと出かける方もいらつしやいます。主治医のOKが出れば行きます。

高齢者を取り巻く日常と非日常のサービスをうまく組み合わせる

—— 介護旅行の三条件は？

篠塚 ご本人の意志、家族の同意、主治医の許可ですね。我々はコミュニケーションに支障ある方はなかなかお引き受けできなくて、どうしても身体に障がいがある方が中心です。身体が不自由で要介護認定を受けている方で認知症を伴う場合は安全のために見守り体制をとらせていただいています。つまり、家族が一緒に来て交代でみるか、あるいは、もう一人ヘルパーを付けてくださいとお願いしています。

—— ターミナルの人もいると言われていますが、要介護4、5の人もいますか？

篠塚 ご利用者の平均要介護度は2・89ぐらいです。ですから、結構寝たきりの方もいらつしやいます。

—— 今後の課題は？

篠塚 同行して介護をすること自体は、あまり手間じゃないんですね。目的地に行くまでの段取り、つまり、調査や打ち合わせなどに8割の労力を要し、その部分にもものすごくコストがかかります。それが当社では、約7000人の方の旅行データがあるので、新たに参加したい業者さんにはこの情報をオープンにして、介護旅行事業を広げてゆきたいと思っています。

—— どうもありがとうございました。